様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３５３０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０１１１

研究課題名（和文）近世中後期上方における作者及び出版界の動態と文学形成―秋里籬島を中心に―

研究課題名（英文）Studies on the current of writers and publishing circles and the generation of literature at Kamigata in the middle and late of early modern ages, mainly concerning Akisato Rito

研究代表者
藤川　玲満（FUJIKAWA, Reman）

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：２０５０９６７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：文運東漸後、近世中後期の上方において文学が形成される在り方を捉えるため、秋里籬島を中心として、作者と出版書肆の動態と相関の解明を行った。籬島の文学及びその関連の未解明であった作品の成り立ちについて、近似する作品との影響関係の実態の分析と、板元書肆の活動の調査を中心に具体的な解明を進め、これらの結果を小説史や題材の系譜に位置付けてその意味と文壇の動向を考証し、変動期の特質を見出した。同時に、中後期上方の文学・出版界の重要な位置にある秋里籬島の文学の全体像を包括的に検証して示した。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of grasping the situation of the generation of literature at Kamigata in the middle and late of early modern ages, after the cultural metropolis having been shifted to Edo, we analyze the current of writers and publishing circles and their relationship, mainly concerning Akisato Rito. We illustrate the process of producing the work of Rito as well as his surroundings which have not been studied yet, by anatomizing the actual situation of the relation and influence with kindred works and by investigating the activities of publishers. In addition, placing the results obtained above in a history of novels and a genealogy of subject matters, we consider their meanings and the current of the literary world to find peculiar features of a transition period. Also, we bring out the achievements of Akisato Rito as a whole and verify them comprehensively, which hold a significant position in contemporary literary and publishing circles with him.

研究分野：日本近世文学

キーワード：近世文学　出版　秋里籬島

１．研究開始当初の背景

本研究は、近世中期から後期の文学界・出版界の動態の分析を展開するが、これと関連する研究動向には、(1)近世中後期上方文化圏の研究、(2)後期上方読本および出版文化史の研究があった。

(1)近来、近世中後期作者の閲歴・動静と文学形成については未解明なところが多く、秋里籬島もそのような作者の一人であった。先行研究では、著作内容から作者の生涯を構想することが試みられ、また文芸情報の一端が明らかにされていた。報告者はこれまでに、籬島の伝記調査の対象を作者自身の編著から同時代の文芸作品群へと転換して事跡を蒐集・分析することにより、俳諧活動の閲歴を判明させ、また秋里家の家譜についても追跡調査を行った。これらを基に周辺文学者に関する新たな調査も展開している。上方文化圏については、先行研究で公家周辺等の文学者の集合体の存在や京都文化社会の重層的構造、漢詩壇周辺の文学者の連繋が見出されている。この時期の上方文学者たちには、領域を交錯した関係が繁く存在するところであり、籬島に関しても複数の文芸領域で活動しており、同時代文学者たちとの関連が強く予測できた。その連繋の実態と、これらの交錯が成した文芸的意義を解明することが必要であった。

(2)のうち、後期上方読本の研究について、先行研究では、江戸出版界に対する上方の読本制作の様相の追跡や、これに関する書肆の動向と絵本読本の分析が進められていた。報告者はこれまでに、これと関連の深い図会作品に関して、都・拾遺都・大和・東海道の各名所図会について、先行書物と本文の対照調査から手法的特質を分析し、その解説記事の内実、典拠の記事を再構築していく主要な工程、作者の編集の手際と技巧を論証した。また、軍記の図会化への発想・方法的展開が見える初期小説『信長記拾遺』について、原拠からの乖離性を分析し、同時代の文学社会の傾向、読者意識、出版事情と連鎖した書物の位置付けを捉えている。出版文化史については、大坂本屋仲間記録や書肆の活動史に関する先行研究があり、報告者はこれまでに、近世中期に創業した名所図会の板元書肆吉野屋為八を取り上げ、加えて名所図会の相板の事情に関して、参入する主要書肆の柳枝軒小川多左衛門と河内屋太助の動向も検討した。文運東漸期以後の上方の文学の実像を捉えるにあたっては、さらに未検討の作品の成り立ち・構造やこの時期の書肆の具体的な解明が必要であった。

２．研究の目的

本研究は、近世中後期上方における作者（文学者）達の相関、及びこれと密接に関わる出版界の動態と、その影響下、この変動期に特質的な文学作品・書物が生成された在り方を解明することを目的とした。従来、文運東漸を経た近世中後期には、江戸に比して上方の文壇・出版界の趨勢は陰ると目され、未検討の事項も多かった。本研究では、安永-文化期の上方文壇の幅広い領域に活動した秋里籬島を中心とし、連繋する上方文学者・書物群を包括的に検討対象としながら文化圏の動態を分析することにより、文化現象的な隆盛を見た書物の文学形成の在り方を外部環境との相互連関と文芸的連鎖の動態から捉え、その文芸的特質と意義、要因となった同時代社会の傾向を探り、文化史上に位置付けて示すことを目指した。

３．研究の方法

本研究は、主に次の点を眼目として調査・考察する方法で遂行した。

(1)作品間の関連、および素材に関する実証的解明

本研究が総体として目指すところである文学界・出版界の動態の解明のための基盤として、実証的な作品研究を行った。分析対象に関して、まず周辺の作品・文芸との本文の比較検証を行い、素材・典拠の特定を始めとする内容構成の実態を明らかにした。その上で、これらの事例を整理・分析して体系的な特質を見出すことを試みた。

(2)領域の史的展開への位置付け

作品研究において明らかになる形成の実態と傾向については、作者の文学活動と人的関係・環境、当該領域の性質の推移・時代性、および隣接領域との影響関係を視座とする分析・考証を行い、文学史・文化史の展開における位置付けと意義を明らかにすることを試みた。

(3)出版事情

制作に深く関与する存在として出版書肆に着目し、作品研究に即して、開板に影響する類書の系譜と板権の事情の調査、出版物として企図されたところと位置付けの分析、板権の推移と後代における利用状況と影響の追跡を行った。これとともに、中後期上方における書肆の営業史・出版履歴を具体的に調査するところから、書物間の関係と出版界の動態について検討を試みた。

４．研究成果

(1)著作からの検討

①読本の制作と出版

近世後期読本史に繋がる可能性が考えら

れた秋里籬島の初期小説について、読本『忠孝人竜伝』を対象に、題材や趣向の通ずる諸作品との交渉の在り方、および設定や筋書を精査することにより、形成方法の実態を解明する調査研究を行った。『忠孝人竜伝』が出版されたのは、一連の名所図会が続刊される事態に先立つ時期（天明年間）であり、これらの流行とは別個の制作態度があり得ると考えられた。そこで、この成り立ちを明らかにした上に、籬島の前作小説『信長記拾遺』および後年の諸作品との関係、そして読本を中心とする近世中後期小説史上で籬島の初期作品に認められる意味を捉えることを主眼とした。

調査の結果、『忠孝人竜伝』には、これと同じ内容の実録『敵討忠孝伝』（成立年代不明、弘前市立図書館蔵）のあることが明らかになった。全編に渉って差異の検証を行い、第一に各々の実録・読本としての方法的特質を明らかにした。第二に、この二作に通有の敵討話に関して、御家騒動や実録の素材として知られた話との接点を指摘し、その複数種を、改変を加えながら組み合わせて利用している生成の実態を明らかにした。さらに、この作品の出版に関して、板元書肆永田調治の開板した敵討物『小栗忠孝記』に着目し、内容の類似性と人的関係を検討した。

以上に述べたような、内容、素材、制作者関連という複数の事象に渉って実録領域との影響関係を明らかにした結果には、後年の軍記の図会化に関して題材の方向性の点から作者の著作間連関を捉えた意義がある。そして、近世中後期小説史において籬島の初期小説に実録種の絵本読本の先蹤と言い得る意味を示した点にインパクトがあると考えている。

②末期の著作の成立事情と出版界

図会物が隆盛を見た後の、秋里籬島の末期の作品にはどのような形成過程があるのか、その成立事情と板元書肆の活動に関する調査研究を行った。籬島の著作として確実なものとして最後から 3 作目である、本願寺八世蓮如の旧跡に解説を施す内容の『蓮如上人御旧跡絵抄』（文化 8 年刊）を対象とした。

この作品については、作者自身と宗派（浄土真宗）との関係が、成立の素地として第一に捉えられるものである。そこに新たに作者の著作物をめぐる環境からの追跡を試みた結果、出版界で図会物が継続的に流行していく展開と、籬島の初期活動を支えた京都の書肆吉野屋為八が真宗関連書と二十四輩物の板権を所持したことを端緒とするこの系譜の板権の推移が、この作品と近接した関係にあることが判明した。そして、名所図会の派生作と言える『二十四輩順拝図会』が大坂書肆のもとで別作者の手に成った事実の傍らに、開祖親鸞の高弟二十四輩から中祖蓮如に対象を転じる着想で作られたことが考えられた。そのことと同時に捉えられたのが、蓮如の伝記を記した書物の系譜との関連の点である。『蓮如上人御旧跡絵抄』は『蓮如上人御一生記絵鈔』（了辨、寛政六年刊）をうけて、対象を伝記から旧跡に転じる着想のあったことが考えられた。

そして、板元書肆の活動に関しては、本作の板元の伊豫屋佐右衛門について、活動の全容を経年的に明らかにし、その上で、特に俳書および小説の出版に着目して分析した。そのことから、俳書に関しては蕉風復興運動の隆盛、小説に関しては江戸との影響関係のもとに展開する読本制作、といった上方文学界の情勢と連動した書肆の活動の在りようが明らかとなった。

以上の研究成果は、名所図会シリーズ以降の籬島の諸作について、図会との繋がりというだけではない観点での探索によって仏教関連書の系譜と時代的動向に看過できない関連を見出したものと位置付けられる。加えて、宗派の題材や関係の板元書肆という初期活動に通ずる特質的要素の解明が、籬島文学の生成に関する分析材料として重要であることを示した点にインパクトがあると考えている。

(2)籬島と上方文壇・出版界

著作の形成をめぐる作者と書肆の相互関係を軸に遂行してきた、作品・文壇・出版界に関する調査研究の成果を基として、籬島文学を包括的に検討し、その全体像を把握することを試みた。主眼としたのは、第一に籬島の閲歴、具体的には著作の文学的基盤となる文壇との接点や交遊、執筆活動を支えた書肆との関係等の周辺環境も含む活動の全貌の解明であり、第二に籬島作品の形成の実態とそこに込められた作者籬島の知識的な基盤と文化的な姿勢、および同時代社会の情勢を見据えて作品を世に出していく出版の様相の解明である。

その成果は、文学活動とその環境の全体像に関しては、籬島の文芸・著述の軌跡とその意義が同時代の文壇情勢の推移に連動するものであることを、上方文芸圏の広範を見渡す考察によって示した。また、出版については、文化史的問題としても考察し、主板元の書肆と関与する複数の書肆の、相互の役割と各々にとっての意義・利点がどのようなことか、多角的に検討して明らかにした。

著作からの検討に関しては、籬島の著述の知識的な基盤について、まず各々の著述の具体的な拠り所とその関係性・傾向を明らかにし、その上で先行書物の活用の在り方という観点で、領域を越えて通底する作品の構築手法を捉えた。さらに、如上の分析で見出される特質は、同時代の文化社会の動向を見据えたものであって、出版書肆の働きと作用し合いながら実現されていることを示した。

この研究成果は、外部環境との相関と典拠の解明をもととして、作者と書肆の意識、そして作品を生み出し、受容した文化界・出版

界の動向から書物の枠組みと本質を見極める試みとして近世文学・文化史研究のなかに位置付けられる。また、新たな実証的検討に基づいて時代の流行・文化現象の発生とその影響を再考することの可能性を示したインパクトを有すると考えられる。

(3)実録・軍書の読本化

籬島の文学活動と著作を包括的に捉えた研究成果について、その全体像の意味と位置付けをより明確なものとするために、籬島文学の周縁にあり、さらに関連性を検討すべき問題として、籬島作品と近世小説史の動向・推移との繋がりについて調査研究を行った。籬島の安永年間の軍書『信長記拾遺』を拠り所の一つとして享和・文化年間に刊行された読本『絵本拾遺信長記』を対象に、既存の文芸素材を「読本化」していく際の具体的な手法と方向性を解明することを主眼に、先行諸作との関係、構想と趣向の取り方、著述態度について分析を行った。

その結果として、先行作の利用の点においては、『信長記拾遺』のほかに、『信長記拾遺』の種本であった実録『石山軍鑑』を改めて参看し、摂取していることが捉えられた。構想と趣向については、上述の先行二作の合流、話材の配置、新規の素材の導入の手段によってストーリー性を拡充する方針を有したことが見出された。著述態度に関しては、軍記の表現における著述内容自体の選択と人物造型、および石山合戦の題材の描写において、『信長記拾遺』の作者の態度との差が見出された。

以上の結果は、軍記の題材の読本化における手法と傾向、そして実録を種本とする読本の制作の動態の一端を具体的に明らかにしたものとして位置付けられる。また、籬島文学の後世における活用の在り方を実証することで、その近世小説史との有機的な関係を明らかにしたインパクトがあると考えている。

本研究課題の成果を踏まえた今後の展望として、上方の文学に関しては、籬島の周縁を越えた調査研究を進めることによって、変動期の文学形成の特質の、より精緻な分析を試みる必要があると考えている。同時に、江戸の文化界・出版界との交流、文学傾向の影響関係についての調査研究を深める必要があると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①藤川玲満、『信長記拾遺』から『絵本拾遺信長記』へ――実録・軍書の読本化――、国文、査読有、125 号、2016、掲載確定（印刷準備中）

②藤川玲満、『蓮如上人御旧跡絵抄』の周辺、ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編、査読有、第 38 巻第 1 号（通巻 49 号）、2014、pp.14-24

③藤川玲満、『忠孝人竜伝』考、ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編、査読有、第 37 巻第 1 号（通巻 48 号）、2013、pp.1-11

〔学会発表〕（計３件）

①藤川玲満、名所図会作者秋里籬島と近世中後期の上方出版界、平成 26 年度大阪府立中之島図書館講演会、2015 年 3 月 28 日、大阪府立中之島図書館（大阪府・大阪市）

②藤川玲満、『忠孝人竜伝』について、平成 24 年度お茶の水女子大学国語国文学会、2012 年 12 月 1 日、お茶の水女子大学（東京都・文京区）

③藤川玲満、『蓮如上人御旧跡絵抄』の周辺、第 5 回「都市風俗画」研究会、2012 年 11 月 10 日、三省堂本社（東京都・千代田区）

〔図書〕（計１件）

①藤川玲満、勉誠出版、秋里籬島と近世中後期の上方出版界、2014、384

６．研究組織

(1)研究代表者

藤川　玲満（FUJIKAWA, Reman）
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20509674